

『処刑覚悟で投降した私（皇女）ですが、

敵将に執着されて剛槍を受け、

懷妊懇願しちゃう小娘に開発されました。』

陽向 優月

目次

第一幕..私の降伏衣装は全裸でした。

第二幕..まだ処女なのに、淫乱皇女として無様にイカされました。

第三幕..陰茎と精液を味わい、凌辱を懇願させられました。

第四幕..処女膣を快楽で壊されてしまいました。

第五幕..無慈悲な肛門調教は最低なのに最高でした。

第六幕..皇女として淫らに凌辱処刑を懇願しました。

第七幕..とうとう私は処刑され、皇女としての生涯を終えました。

第一幕…私の降伏衣装は全裸でした。

戦場は私の処刑を待ち望んでいるかのように静まり返っている。

降伏の条件を伝えられた私は、部下の近衛騎士たちを見ながら微笑んだ。泣いている顔、辛そうな顔。安堵した顔やほくそ笑んでいる顔がないのは、私がお飾りでも指揮官として認められた気がして嬉しい。

「みんな、ありがとう。妾腹の第六皇女に過ぎない私に、これまでついてきてくれて」

「姫様、まだ戦えます！」

「そうです、リネット様。ここで降伏だなんて……！」

「いいえ。まだ余力があるからこそ、降伏する価値があるのよ」

この戦争は、各国の思惑がまるで神様が盤上にいたずらに駒を投げ散らかしたかのように入り混じる。昨日の味方が明日には敵となっているような混沌としたものだ。

少数で移動していた私たちの部隊はあっという間に敵となったシュヴァルツ王国の軍に囲ま

れ、逃げ込んだ出城も孤立無援となった。しかも敵将はあの猛将『漆黒の牙』ギルベルトだという。

最後の一兵まで死ぬ覚悟で戦ってもらえる自信はある。だけどそれは無意味だ。私の首だけでみんなが助命されるなら、死ぬ意味はある。だから私は、あえて降伏を選択した。

「では、条件はすべて受け入れます」

私は魔法契約書にサインをする。私の指先から放たれる魔力の軌跡を見た使者が、感嘆の息を漏らす。

「さすがですな、エルディアン聖国の白銀の魔女様」

「大それた二つ名でした。この通り、敗れて凌辱と処刑を待つだけの女です」

将兵たちを武装解除するだけで生かす条件は、私の生殺与奪。変わっているのは、明日の朝に私が処刑を懇願したら公開で斬首し、拒否したら公開で串刺し刑に処するという内容だ。

私の死ぬ覚悟を侮られたようで、少しばかり歯痒い。

もちろん、立派に首を差し出してさらされる覚悟だ。この身体もきつと無惨な扱いを受けるだろう。でも死んだ後のことだと、割り切っている。

「では早速、参りましょうか。見ての通り、武装は既に解除しております」

私は鎧を外して、せめてものの皇女の誇りとして、持っていたものでは最も華美なドレスを身に着けている。

だけど使者様は、憐憫の情を露わにした。

「申し訳ございませんが、契約された武装解除はすべてという表現になっております」

「……武具はすべて外しておりますが？」

「どこに何を隠しているか、分かりませんので」

少し遅れて、使者様の言葉の意味に気が付いた。さすがに羞恥心で耳が赤くなってしまう。

「つまり、全裸になって投降せよと？」

「おっしゃる通りです。なお皇女様はすでに調印されました……」

私は嘆息した。もちろん、この身体を処刑前に凌辱されることは覚悟していた。だけどここから裸体をさらすのは予想外だ。

「今すぐ、契約の履行を」

「……分かりました」

不履行は、将兵たちの命の危険につながる。私は諦めて脱衣を始めようとしたが、近衛たちが手を押しとどめる。

「姫様。よろしければ、私たちにお手伝いを」

「ありがとう」

「私たちが脱衣をしてもよろしいでしょうか？」

使者様がうなずき、近衛騎士たちが動き始める。私は貴人らしく、人の手によって生まれたままの姿になっていく。

乳房が外気にさらされて、少し肌寒い。私の方は女性ばかりだけど、相手は男性がほとんどだ。視線が突き刺さる。妄想で乳房が犯されているのを感じながら、私は下腹部も露わにしていく。

「陰毛がないようですね」

「死体をさらされる際に見苦しいので、処理しました」

異性に見られていると思うと、恥ずかしい。だけどここで犯されることはないだろう。私を凌

辱するのはギルベルト將軍だけのはずだ。

「靴だけは許可します」

「感謝申し上げます。では参りましょう。皆さま、お達者でね」

捕虜となった以上、速やかに凌辱を受けなければならない。私は使者団とともに慌ただしく部屋を出て、無人となった出城の廊下を歩く。

「姫様の部下たちは、氣を利かせて裸体を見ないようにしてくれているようですな」

「そうですね」

「下世話なことを言うと、あなたのように高潔な女將軍、しかも皇女様を犯せるギルベルト様が羨ましいです」

全裸で歩くというのは不思議な感覚だ。門を出ると、どよめくような歓声が起こった。遠目にも私が全裸であることが分かるのだろう。

歩いて本陣に近付くと、視線があちこちから突き刺さる。まるで視線に輪姦されているかのようだ。乳房にもお尻にも、顔にも……妄想の精液で私はぐちぐちよに汚されている。

「おお、よく来たな皇女殿。降伏契約をしてくれて感謝する」

本陣にたどり着く前に出迎えて来たのは、大柄な男性だった。

（この方が、ギルベルト将軍。異名に相応しい外見ね）

精悍な顔立ちは勇ましくも整っており、本国では乙女の羨望の的だろう。それでいて黒髪は流れるように美しく、漆黒の牙という二つ名も納得する。

「武運拙く、御身の前に裸体をさらしております」

「ああ。美しい『白銀の魔女』殿を、余すところなく抱き潰してやるぞ」

ギルベルト様は私の手を取ると、ご自身の股間に押し当てた。硬い。それに熱も布地越しに伝わってくる。身体が熱くなる。今から私はこれに貫かれて女にされ、処刑の寸前まで精液を注ぎ込まれるんだ。

「かなり大きな乳房だな」

無遠慮に持ち上げるように揉まれるけど、嫌な気はしない。近衛騎士たちにも羨ましがられていたので、自分がかかなり大きいことは分かっている。

「ギルベルト様のお好きなように、お使いください……ここで犯されるのですか？」

「それも一興だが、皇女殿も二人きりの方が遠慮なく乱れられるだろう？」

「私は処女ですので……乱れる、ということは分かりません」

誤魔化そうとしたけど、正直に答えてしまう。魔法による強制力の発動だ。私が調印した契約書は、かなり高級な魔法紙を用いていたらしい。

「お前を犯すのは、あっちの天幕でだ」

昨日まではなかったはずの大型の天幕が張られている。二人にはもったいないほどの大きさだし、私を犯すために特別に設えたと思うと少々驚きだ。

「犯されるために湯浴みはしているのだろうか？」

「はい。戦陣ではありますが、ギルベルト様が不快に思われないように可能な限り清めております」

「では、早速だが犯すぞ」

私は手を握られた。ゴツゴツとした大きな手だけど、意外と握り方はお優しい。剣を振るってきたこの手で乳房が形を淫らにゆがめ、股間をまさぐられるのだと思うと性的な興奮を感じてしまう。

「皇女殿の指は柔らかいな」

「魔法士は剣を振るう機会がないので」

私は手を引かれながら、凌辱の場へと赴くのだった。

第二幕…まだ処女なのに、淫乱皇女として無様にイカされました。

足取りは意外なほどにゆっくりだ。舞踏会で強引な殿方にダンスを申し込まれたように錯覚してしまう。

大柄なギルベルト様の背中は筋肉質でたくましい。この方と昨日まで殺し合いをしていたのだと思うと、不思議な気持ちになる。

「分かっていると思うが、誰も近付けるな」

「はい、ギルベルト様」

生真面目そうな女性騎士が見張り役らしい。ともに天幕の中へ入ると、すぐにお香の匂いが鼻腔をくすぐってきた。花束のようなふんわりとした良い香りだ。ベッドに敷かれているシーツも清潔そうだし、可能な限りの配慮をしてくださったことが伝わってくる。

「どうだ。急ごしらえだが、皇女の初夜に相応しい場を整えたつもりだ」

「まだ夜ではございませんし、最初ですが最期でもございます」

ギルベルト様が、少し驚いた様子でこちらを見つめられる。こうやって正面から見据えると漆黒の瞳は美しく、意外なほどに理知的なお顔立ちだ。出会いが戦場でなく舞踏会だったなら、恋に憧れる少女のような気持ちを抱いたかもしれない。

「意外だ。皇女殿は軽口をたたくのだな」

「元より、このような性分でございます。お気に召さなければ、猿ぐつわをして凌辱なさってくださいませ」

その笑みにどう猛さが混じる。大きな手が私の顎に触れて顔を持ち上げる。

「可憐すぎてついつい忘れてしまうが、数々の戦場で功績を挙げた名の知れた指揮官様だったな……しかし、美しい銀髪だ。戦場の塵も汚すことを恐れるか」

「魔力が通っておりますので……」

髪の毛を手で梳かれる。この天幕に入ってから、私はまだ乳房も陰部も触られていないし、陰茎を触ってもいない。

「あの、ギルベルト様。私には凌辱をするほどの魅力がないのでしょうか？」

「ん？」

唇の感触を指で確かめながら、ギルベルト様がにやりと笑う。糖蜜を舐めて湿らせてきたから、失望させるような感触ではないはずだ。

「いや、むしろ逆だ。皇女殿下ほどの美姫を俺は知らぬ。どのような犯し方をして卑猥な鳴き声を上げさせるか、頭の中で考えて愉しんでいたところだ」

「悪趣味でございますが、降将である私に拒否権はございません。たつぷりと脳内で犯したら、どうぞ実行なさってくださいませ」

「俺は卑猥な口上が大好きでな。たつぷりと懇願してもらおうぞ」

唇が近付いてくる。私は初めての接吻を、処刑予定の捕虜として奪われるのだ。少し上を向いたまま、唇が触れた。舌が伸びて唇を舐めて湿らせ、そのまま私の中へ入ってきた。

「ん……っ、んう……っ」

舌も大きい……入るなり、私の口内を蹂躪している。歯列をなぞられて、背筋がぞくりと震える。陰茎もこれくらい大きくて、私の膣を貫くのかと思うとお腹の奥が疼く。

「んっ、んうっ、あむ、んむう……っ」

私たちは視線を合わせながらキスを続ける。唾液が混ざり込んできて、口内に溜まる。口の端から漏れそうになったところで、舌が引き抜かれた。

「飲め」

「んく、んく……っ、飲み込みました」

「男の体液の味はどうだ」

「よく分かりませんが、精液も同じように飲むのですよね」

「ああ。俺の甘露をたっぷりと飲ませてやるからな」

「本当に甘いのですか？」

「いや、飲んだ女たちに言わせれば苦いらしいぞ。それ以上にどろどろとして喉に貼りつくそう
だ」

「私も皇女として閨の勉強はしておりますので、存じております」

「本当に軽口が好きなのうだな……んおっ!？」

私は自分からギルベルト様の陰茎を触る。見事なまでに勃起していらっしやる。たしなみとして教わった手技で竿の形に沿って撫でながら、精一杯の淫らかな微笑みを作る。

「淫らかな皇女で、失望されましたか？」

「いや、大好物だ」

「女としての魅力がないと思われるのは、癪でしたので。明日にはさらし首になる女です。どうぞ、黽つてくださいませ……しゃぶりましょうか？」

私は奉仕を命じられ、股間に頭を寄せて啜えさせると思っていた。だけどギルベルト様は、思わぬ行動に出た。

「そうだな、その場で足を開け」

「陰茎をしゃぶらせないのでですか？」

「まずはお前をメスとして自覚させたいんだよ」

一転して荒々しい言葉遣いだけど、所作は変わらず丁寧だ。触りやすいように足を開くと、すぐに指が伸びて来た。まずは陰核の周りを優しく撫でられる。

「濡れているな」

「はい、興奮して濡れております」

陰毛を処理した膺の周りは、指の感触を直に伝えてくる。男らしい力強さで、私は膺口を愛撫される。

「や、あ、んあ……っ」

「こっちを見ろ」

拒否権はない。私の瞳は吸い寄せられ、下半身は指が往復する度にぬめりを増していく。早く触らりたい。陰核をこすりたい。この指で荒々しく愛撫されたら、どんなに気持ち良いのだろうか。

「あっ、そこは……っ」

内ももを撫でられる。愛液がそこまで垂れていることに、触られて気付いた。指だけなのにこんなに良いなんて。やだ、お願い。もっと触ってほしい。

「この香は性欲を高める。効いているだろう？」

「効いて、おり、ます」

「どうさりたい？」

意地悪だ。私が殺される覚悟を決めて、兵士たちの前に裸体をさらして、犯されるために敵将であるあなたの前に立っているのに。

「素直になれ。捕虜としての礼儀だと思うが？」

「……陰核も、触れていただきたいです」

「俺は卑猥な口上が大好きだと説明したぞ？」

「どうか、クリトリスを触ってくださいませ。快楽をお与えください」

乳房を驚づかみにされる。私の大きな胸を強引に握りしめながら、手のひらで乳首を潰すように愛撫される。胸の奥から脳髄とお尻へ、雷撃魔法を受けたときのように快楽が走り抜けていく。

ああ、ダメだ。早く触られたい。淫らな女だと思われても、気持ち良くなりしたい。

「もっと碎けた口調になればよ、皇女殿。軽口が好きなんだから、普段はもっと普通のしゃべり方もできるんだろう？」

「……触って、ください……お願い……」

こんなこと言ってる自分が信じられない。だけでもう、我慢できない。私は皇女として立派に死ぬつもりだったけど……最期くらい、快楽に身を委ねても良いよね？

「もっと陰部を触って。クリトリスを淫らに愛撫して。私に女の快楽をたくさん教えてちょうだい」

「やっと調子が出て来たな。こっちが本性か？」

「本性とか……そんなのは分からないわ。処刑する予定の女の子が恥をしのんで凌辱をお願いしてるんだから、せめて気持ち良くしてあげるのが男ってものじゃないかしら？」

「まあ、良い。たっぷりとよがれよ」

指が不意に、クリトリスの外皮に触れた。自分でする時よりも、何倍も良い。親指と中指で挟まれて、ギュッと刺激される。

「お^おお^おお^おっ♡」

「お気に召したようだな」

人差し指が伸びて、溢れ出た蜜をすくい取る。何をされるか期待して、処女なのに肉体が疼いてしまう。今の私はきつと、発情した顔になつてる。

「それを、塗ってくれるの？」

「ああ、ご期待に応えてやるよ」

ぬるりと、指が蛇のように動く。私のプライドは絡め取られていく。膝が期待に震えて碎けてしまいうさだ。

「お願い、塗って。愛液でぬるぬるになった指で」

「愛液は上品だな。まん汁と言え」

「……おまんこ汁でぬるぬるになった指で、クリトリスを乱暴に触ってめちゃくちやにして……んあぁあぁっ♡♡」

来た。ゴツゴツした男の指は、自分の指とはぜんぜん違う。指揮官としてお互いに殺し合ってた男に嬲られてるんだと思うと、さらに興奮する。乳房も揉まれる。

「キスもしてやるよ。俺の唾液を味わえ、淫乱皇女」

「お願い、たっぷり飲ませて……んむうう~~~~~……っ♡♡」

おねだり通り、唾液が落とされてくる。私は喉を鳴らして胃の中へ落としていく。それがそのまま愛液になってるんじゃないかってくらい、膣口は中まで濡れている。気持ち良すぎて涙目になっちゃう。

「んむうっ、んむうっ♡♡」

敵将に凌辱されているのに、気持ち良すぎる。きっとこの人は、明日の斬首の瞬間まで私を離さない。むしろ肉槍と化した逸物で突かれながら斬られても良い。優しいから、公開じゃなくて密殺してくれるはずだ。

まだ処女なのに、犯される妄想が止まらない。あつ、ダメだ。私、絶頂しちゃう。淫乱皇女として、無様にイカされちゃう。

プシュツ、プシュツ、ぷしゃあつつ♡♡

腰がガクガク震える。いった。いっちゃった……手が交代する。私の愛液でべとべとになった手で乳房を揉まれる。今度は膣の入口も指でほじくられる。もうこのまま、腰を落として処女膜を破らりたい。

「ぷはあ……っ、何か言いたそうだな、皇女殿」

「お願い……犯してえ。あなたの逸物で、処女膜を一思いに貫いて。ずるいわ……こんな愛撫をされて、夢中にならない女の子がいた？」

「いや、いなかったな」

ギルベルトは私を抱き寄せると、もう一度キスをする。軽く唇を触れ合わせるだけの軽いキスで、逆に心が軽くなる。

「女慣れしてるのね」

「自分で言うのも何だが、男前だからな。だが皇女殿、お前はそれでも極上だぞ。俺を前にしても委縮せず、それでいて美しくも淫ら……」

抱きかかえられて、ベッドへと運ばれる。さっき褒められた銀髪が流れて、ギルベルトのお腹をくすぐる。男性の香りはもつとむさくるしいと思っていたけど、意外なほどに清潔感がある。私を抱くために湯浴みをしてくれたんだろう。

「待って、せっかくの清潔なシーツを破瓜の血で汚してしまうわ。床に四つん這いになるから、そっちで犯してちょうだい」

「そんなこと、気にするな……だけど、犯してはやるぞ」

最後はベッドに投げるように置かれた。柔らかく沈んだベッドは、どこから調達したんだろう。ギルベルトは手早く裸になると、私に馬乗りになっておちんちんを見せ付けてくる。

「これでお前の純潔を討ち取る。覚悟は良いな？」

「ええ、でもその前にしゃぶらせてくれるのね？」

「ああ、淫乱皇女の奉仕を味わってやる」

私は素直に、初めての口淫奉仕のために唾液を分泌させるのだった。

第三幕…陰莖と精液を味わい、凌辱を懇願させられました。

ギルベルトの陰莖は目の前で見ると大きい。それに腹筋も見事だ。この頑健な肉体に朝まで抱き潰されるんだと思うと、鼓動が高鳴る。私の肉体を余すところなく貪ってから、処刑台へ連れ出してほしい。

「まずは捕虜らしく、亀頭に口付けをします」

少し匂いにする逸物を見つめたまま、恋人のようなキスをする。ビクンと跳ねた。舌を伸ばすと、少しだけ塩気がある。排泄もする場所を奉仕として舐めるからこそ、男の人も興奮するんだろう。

「れろ、れろお……雄々しいわ。これに服従するために、股を開くのね」

「わざと俺じゃなくてちんぽに媚びようとしてるな？」

「あら、自分の陰莖に嫉妬したの？」

ほったたを陰莖でペシペシと叩かれる。硬いけど優しい叩き方だ。そのまま唇に置かれたので、もう一度舐めていく。男に馬乗りにされるのは幼い頃にお兄様と喧嘩をした時以来だ。

「本当なら罰として喉奥を突いてやるところだが、まだ未経験だからな」

「明日には殺すんだから、もったいないんじゃない？」

荒々しく犯されるかと思ったけど、意外とそうでもない。私は頭を持ち上げて自主的に亀頭に口に含んだ。舌を回して陰茎の形を覚えるような奉仕をする。唾液をまとわせて頭を前後させ、刺激していく。

「良いぞ。そのまま舐めてくれ」

「んむ、んじゅ、じゅるう……んうううっ♡♡」

不意打ちで、クリトリスを撫でられる。さっきの愛撫で快楽を覚えさせられた肉豆は、待ってましたとばかりに下半身に快感を走らせてくる。

男の指は自慰とぜんぜん違う。私と違う触り方をするしリズムも違う。怖くてできなかった触り方も、平気でして来る。

「股を下品に開け。俺の愛撫で感じる淫らな顔を、もっと見せてくれ」

銀髪を優しく撫でられながら、クリトリスへの愛撫は少し激しい。こんなの我慢できない。たくましい肉体の男性に馬乗りになされて、好きなように裸体を触られるなんて、屈辱のはずなのに嬉しい。

私は私で、陰茎を口に含んで唾液をまぶしている。もちろん、ガチガチに硬く仕上げた肉槍に処女膜をぶちぶちと引き裂かれて、精液をどくどく注ぎ込まれるために。

「んむうつ、んゝゝゝゝゝゝゝツツ♡♡ んじゅ、じゅぶつ、じゅぶつ、んつ、んつ、んむう、んじゅつ、んあつ、もつと、もつと、もつとお……っ♡♡」

「素直になって来たな。誰に媚びたいんだ？」

「もちろんあなたよ、ギルベルト♡ もつと私に快楽を教えて♡ 女としての幸せを与えてから、処刑して♡」

「よし、じゃあ次はこの乳房を使ってやる」

唾液でどろどろに汚れた陰茎が降りていく。乳房で陰茎を拭かれた。屈辱的な行為のはずなのに逆に可愛がられていると感じてしまう。私の大きな乳房は今から性器になるんだ。

「ねえ、ギルベルト。私ね、視線でたくさん犯されたの」

「犯されてどうだった？」

「屈辱だったわ。でもね……陰茎を挟むのは、あなたが初めてよ♡」

陰茎が谷間に置かれて、私は両手で左右から挟むように指示された。ギルベルトはさらに小瓶

を手にとって香油を垂らしてくる。とろりと肌になじんで、甘いけど少し不思議な香りを放っている。

「これも催淫の効果があるの？」

「ああ。娼婦のように淫らな皇女殿を愛でたいからな」

「じゃあ、舐めさせて」

香油をすくい取った指を、私は舌を突き出して迎える。二つの指が舌を挟みながら香油を与えてくる。蜜の味が少しして意外と舐めやすい。体温が少し上昇してお腹の奥がじゅんとなるのを感じる。

「では動かすぞ」

陰茎が前後運動を始める。お互いの肌が熱い。ぬるりと亀頭が顔を出して、また奥へ戻っていく。私が力を込めると、亀頭の勢いも増していく。

「良いぞ、皇女殿。淫らな娼婦の奉仕だ」

ギルベルトの息も荒い。見上げると、さっきよりも赤らんで発情した表情になっている。淫らかな匂いが谷間から漂ってくる。これが先走り汁と呼ばれるものなんだろうか？

「もしかして、陰茎から摂取してるの？」

「ああ。お前の奉仕で俺も乱れていく。覚悟しろよ、皇女殿。お前が想像しているよりもずっと、獣のような交尾を果たすことになるからな」

獣になる。その言葉が私の脳髓を揺らす。皇女と將軍という立場なのに、それをかなぐり捨て
るんだ。皇女としての尊厳を碎かれて、一匹のメスとして朝まで犯されるんだ。

「ああ♡♡♡ やだっ、今は、んっ、やつ、う、あっ、おおおぉぉぉぉぉぉっ♡♡♡」

濁った快楽の声が出てしまう。指の腹で陰核をつぶされる。優しくない。私を本気でイカせる
つもりだ。分泌される愛液がねばつのが分かる。

「待って、まって……っ、また、イカせる……の？」

「ああ。覚悟しろと言ったはずだ」

「分かったわ……イきたいの。お願い、イかせて」

ギルベルトが唇に触れて、にこりと笑う。もう、そんな笑みは今は見たくない。もっと荒々し
く扱われて、無様に絶頂したいのに。

「褒美だ。俺も一緒に果ててやる」

「出して、くれるの？」

返事はくれない。その代わりに、大きな手が乳房を左右からさらに強く挟み込む。性器となった柔肌を押し分けて、陰茎が暴れまわる。

「くう……っ、果てる……っ！」

「射精して。皇女の顔をあなたの精液で穢して……っ！」

びゅるびゅる、びゅるびゅる♡

熱い液体がほとぼしり、顎を撃つ。次の一撃は髪の毛まで飛んできた。鼻筋にかかって、濃密な淫臭に包まれる。次の射精は舌で受け止めた。苦いと言われたけど、確かに苦い。

「すごい。髪の毛まで飛んだわ」

「かなり射精したな」

「そうなのですか？ 初めてですので、分からないわ」

「しばらく、女は抱いていなかったからな」

射精を終えたギルベルトは、陰茎に指を添えて残った精液を搾り出し、乳首に塗りたくっている。まだ硬さの残る亀頭は刺激が強い。

「射精を終えた陰茎は、しゃぶって清めるものだと教わっていたけど？」

「皇女も娼婦のような振る舞いを教わるのだな」

感心したような物言いをしながら、ギルベルトは腰を突き出す。私は手を添えて亀頭から裏筋へ舌を這わせていく。見上げると興奮した表情だ。私の性技に満足してくれているのだと思うと、凌辱であつても多少は嬉しい。

「射精したら萎えると聞いていたけど、勃起したままなのね？」

「お前のような極上の美姫を貫けるんだ。萎える暇なんてないさ……こっちも舐めてくれないか」

私の手をつかんで、丸い部分を触らせる。熱い……ここで子種を作っているらしいけど、孕ませるための場所を愛撫させるんだと思うと、私も少し緊張してしまう。

「もちろん、私に拒否権なんてないわ。乗ったままかしら？」

「ああ。屈辱を味わってくれ」

ギルベルトは膝をさらに前へ進める。竿の部分が顔の上に乗る。屈辱的な態勢に、男に支配されているということを実感する。もしギルベルトが私を殺そうと思えば、首を絞めて簡単に絶命できるだろう。戦場なら短刀を首に突き刺すだけで良い。

「まるで一騎打ちに敗れて、股を開いて命乞いをする女騎士だわ」

「皇女殿の命乞いは劣情を誘いそうだな」

「話題に出したのは私だけ……それだけは拒絶させて。私の尊厳は踏みにじっても良いけど、覚悟を軽んじられるのは嫌だわ」

返事を聞く前に、私は玉袋へ舌を這わせる。肌は硬く張っている。

（あれだけ射精したのに、まだこんなに精液を溜めこんでいるのね？）

私はできるだけ丁寧な、しわに沿って奉仕をする。少し汗のにおいと味がする。

「ああ、そうだ。舐めながら竿は手で扱いてくれ」

肛門を舐めさせられることも覚悟していたけど、意外とギルベルトはそこまで求めなかった。私が丹念に舌を這わせると、素直に喘いでくれる。腹筋に指を這わせると、本当に硬い。

この屈強な肉体に優しく押し掛かれて純潔を喪うんだと思うと、少なからず性的に感じてし

まう。

「硬いわ。もう貫きたくて、仕方ないんですよ？」

「その通りだ。懇願してくれるかな、皇女殿」

ギルベルトが身体を起こして、私を観察できる位置まで引いていく。淫らなおねだりをご所望らしい。自分で竿を扱いて勃起を維持させながら、視線が私の顔と股間を上下している。

「あなたの陰莖が欲しいわ。敗北の証として肉槍を突き刺して、純潔を討ち取ってちょうだい」

私は精一杯の淫らな表情を作りながら、ギルベルトに向かって割れ目を指で開いていく。自分でも嗅いだことがないような、濃密なメスの匂いだ。軽く指で触ると、ぬるりとした液体に誘われてくちゅりと沈み込んでいく。

「処女膜は披露できているかしら？」

「もちろん、見えているさ……淫らな肉体だな」

「あなたが凌辱を求めるからよ？　もちろん、その逞しい指でたっぷり愛撫してもらったおかげでもあるわ」

「良い媚び方だな。だけど本当の淫乱はな、そんな澄ました言葉遣いじゃないんだよ」

ただギルベルトは、少しばかり思案顔になる。これまでに抱いてきた女性と比べているんだと思うと、仕方ないけどちょっとだけ腹立たしい。

「皇女殿の長所は、その高貴さと品のある下品な口上だな」

「品があるのか、下品なのか、ハッキリさせてよ」

「まあ、そう言うな……だけど、せっかくの初夜だ。最初だけで良いから、娼婦のように淫らな懇願も聞かせてほしい」

（まるで、恋人におねだりをするような表情ね）

「ちんぽとか、まんことか……そんな、あられない言葉を使ってくれ」

私が命令を拒否するわけがないのに。私は指を動かして膣口や陰核を触り、乳房を揉みながらさらにいやらしく舌を突き出してみせる。

「あなたのちんぽが欲しいわ、ギルベルト。おまんこにぶち込んで、処女を散らしてほしいの。その遅い身体で私を組み伏せて、容赦なく犯して」

「良いぞ。その調子で続けろ」

「精液をおまんこの中に注ぎ込んで、汚れたちんぽをしゃぶらせて。斬首の瞬間までちんぽを突

っ込み続けて、私に女としての快楽を教え込んでちょうだい」

ギルベルトの陰茎がビクンと跳ね上がる。表情に獣のような余裕のなさが現れる。

（あら、私って娼婦の才能があつたのかしら。随分と劣情を煽ったみたいね）

「我慢できん。犯すぞ、皇女殿」

「だから、覚悟はもう……きやつ!？」

私はあっけなく、ベッドの上に組み伏せられるのだった。

（体験版はここまでです）

